

令和元年6月7日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21147

研究課題名(和文)国会討論をもとにした政治コミュニケーションの批判的談話研究：対人関係を中心に

研究課題名(英文)A Critical Discourse Analysis of the Interpersonal Aspect of Political Communication based on Debates at the Diet in Japan

研究代表者

柳田 亮吾 (Yanagida, Ryogo)

大阪大学・マルチリンガル教育センター・特任助教(常勤)

研究者番号：00756512

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国会討論を起点とした政治コミュニケーション - 議員間のやりとり、それをいかにメディアが報道しているか、その報道をみた市井の人々の判断・評価 - の対人関係的側面を分析することで、コミュニケーションの負の側面を批判的に分析した。コミュニケーションは人々が礼儀正しく振舞う協調的な場では必ずしもなく、時として人々が己の利害・関心(他者のイメージを貶める/自己のイメージを高める、力を持つ他者と関係を築き利用する、他者を疎外するなど)を追求する闘争の場となることを実証的に示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

談話実践の対人関係的側面を扱う社会言語学・語用論の一部であるポライトネス研究は、コミュニケーションにおいて人は他者に対して協調的で、礼儀正しく振る舞い、他者の面子を保つという暗黙の前提の上に成り立ってきた。本研究はこれまで等閑視されてきたコミュニケーションの負の側面に焦点をあてることでポライトネス研究の問題点を超克すると同時に、右傾化する社会やポスト真実といった現代社会におけるコミュニケーションのアクチュアルな問題を考える足掛かりとなる。

研究成果の概要(英文)：By analysing the interpersonal aspect of political communication based on debates at the Diet in Japan, which involves the members of the Diet discussing at the Diet, journalists making the news on them, and lay people reading/watching the news and making judgment and evaluation on the politicians and/or journalists, this study critically investigates a negative side of communication: people do not always cooperate with each other politely, rather they pursue their interests such as enhancing their own images and/or damaging others' images, building relationships with others who have power, and neglecting/excluding others.

研究分野：談話研究

キーワード：イン/ポライトネス 対人関係的談話実践 利害・関心 政治コミュニケーション 国会討論 やじメディア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

言語は世界の表象を担う観念構成的機能、人間関係に資する対人関係的機能、アイデンティティの表出に寄与するテキスト形成的機能の三つを有する(Halliday 1994, Fairclough 2003)。語用論・社会言語学の一分野であるポライトネス研究は、上記三つのうちの対人関係的機能に焦点を当てる研究として発展し、社会学者 Goffman (1967) の face (面子) の議論を援用した Brown and Levinson (1987) を中心に、欧米のみならず、敬語を有する日本(語)を含むアジア諸国の多様な言語文化についての膨大な研究の蓄積(例えば Agha 1998, 井出 2006)がなされてきた。これらは人間関係の調整に言語がどのように用いられるかについての研究を大きく前進させたが、一方でその研究の枠組み、理論には大きな問題点も指摘されている(Eelen 2001)。この Eelen の批判を嚆矢に、Watts (2003) や Mills (2005) らは談話的アプローチと称される研究の方向性を打ち出し、新たな研究の地平を切り開いた。この新たなアプローチは既存の研究・理論の批判において大きな役割を担ったが、本研究開始当時、そして現在においても、どの論者も分析データの統合的な分析方法を提示できてはおらず、試行錯誤が続いている。

本研究は Eelen によって提起された批判を克服するため、柳田(2015)の分析枠組みを発展させ、対人関係的談話実践における利害/関心に注目しつつ、国会討論を起点とする政治コミュニケーションを批判的に分析、考察することを試みた。

2. 研究の目的

国会討論をもとにした政治コミュニケーション(国会討論という相互行為、テレビ・新聞等のメディアによる媒介、市井の人々の受容)を分析する。分析においては、ポライトネス研究に批判的談話研究(Critical Discourse Analysis)とオーディアンス研究の知見を統合し、コミュニケーション全体を俯瞰することのできる新たな分析枠組みを用いる。対人関係における利害/関心を軸に、国会討論において話し手である議員がどのような言語行動を行っているのか(表出的イン/ポライトネス)、それが受け手の議員、あるいはジャーナリスト・メディアの受け手にどのように判断・評価されているのか(分類的イン/ポライトネス)、そして、その判断・評価がどのような価値観・イデオロギーに依拠しているのか(メタ語用論的イン/ポライトネス)の三つを総合的に考察する。

3. 研究の方法

本研究では柳田(2015)で提示した新たな分析枠組みを発展させ、既存のポライトネス理論に巢食う以下のバイアスの超克を試みた。

・話し手中心主義の克服:

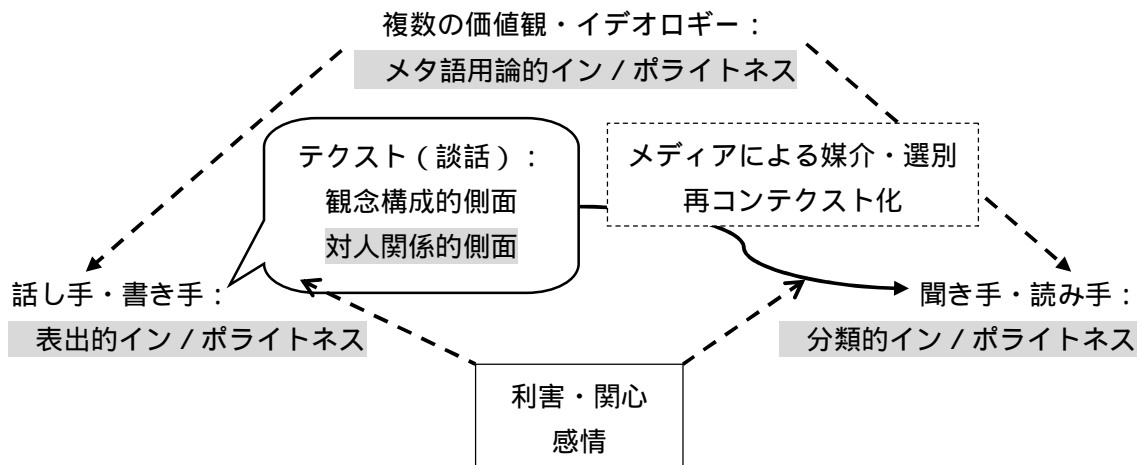
対人関係コミュニケーションにおいて話し手のみならず、聞き手がどのような役割を担っているのかを分析する。

・ポライトネスへの偏向からノンポライトネス、インポライトネスの包摂:

よりよい対人関係を志向する「丁寧」な言語使用・実践のみならず、「丁寧」とも「失礼」とも評価されない無標の言語行動、人間関係を破壊する「無礼・失礼」な言動をも分析の対象とする。

・均質な文化観からの脱却:

規範的な観点から言語文化を均質に捉えず、どのような言語行動が「丁寧」あるいは「失礼」であるかについて社会においてどのような不一致があり、それをめぐりどのような争いがなされているのかについても考察を行う。



具体的には、上の「2. 研究の目的」で述べた3つの分析の観点(表出的イン/ポライト

ネス、 分類的イン/ポライトネス、 メタ語用論的イン/ポライトネス)を包含するコミュニケーションモデルをもとに、国会討論の分析を行った(上図参照のこと)。分析の対象は国会討論とし、中でも「やじ」はハンガリーは Hungarian Academy of Sciences の Dániel Z. Kádár 教授、中国は Guangdong University of Foreign Studies の Yongping Ran 教授と共同で行ってきた研究プロジェクトのテーマでもあったため、重点的に分析と考察を行った。

4. 研究成果

(1) 理論的発展

本研究では、対人関係的談話実践とそこにみられる利害・関心を分析するため、社会言語学・語用論の枠組みで議論されてきたポライトネス研究を社会的、かつ、社会心理学的に拡張することを試みた(学会発表、[、](#)、[、](#)、)。

社会的拡張においては、文化資本が人が「どのように」対人関係的談話実践を行うのかについて考察を行った。具体的には、コミュニケーションにおいて、話し手は社会的に高い評価を受けている希少な言語変種・表現を身に着けることに利害・関心を有しているのに対して、聞き手は分類・評価を通して自分のもつ資源の価値を高めること(自己の卓越化:分類闘争)に利害・関心を有していると考えられる。また、社会的拡張のもう一つの側面として社会関係資本に注目し、人は「なぜどのような目的のために」対人関係的談話実践に従事するのかについての考察も行った。対人関係的談話実践は他者との関係性から生じる利害と他者からの評価によって生じる自己イメージについての象徴的な利害の二つに動機づけられている考えられる。他者との関係性から生じる利害については、他者の有する資源にアクセスすることによって利益が得ようとする場合(例えば、社会的立場の高い人に媚びることで口利きなどの見返りを得る)と、他者との関係性を破壊あるいは他者を排除することで自己と自己の有する資源を保護し、特権を維持しようとする場合(例えば、ヘイトスピーチにおいて移民や外国人をフリーライダーとして排除しようとする)がある。他者からの評価によって生じる自己イメージについての象徴的な利害については、よい品行を提示することで他者からの信頼や尊敬、榮譽を得ようとする場合が考えられる。以上二つの利害・関心は表裏一体であり、特定の言語行動によって両者の利益が得られる場合もあれば、一方の利益の追求が追及されるあまり他方においては損害を被る場合があり、対人関係的談話実践は両者の利害の均衡を保つようなされる傾向にあるといえる。また、社会心理学的拡張においては、社会関係資本の議論では捉えにくい、他者との関係を拒絶する談話実践の根底にある人間の心理、感情と関係する可能性を示した。この点については未だ試論の段階であり、今後さらなる研究を行っていく。

以上の利害・関心に関する考察は、ポライトネス研究が前提としてきた、Durkheim から Goffman、Brown and Levinson へと受け継がれてきた機能主義的な社会観の再考を促し、本研究では M. Gluckman、V. Turner の提示した社会における葛藤や危難に注目するアプローチ(rituals of rebellion、anti-structure)の可能性について示唆した。

(2) データ分析

以上の理論的考察をもとに、本研究では以下の4つのデータの分析を行った。本研究では当初国会討論を起点とした政治コミュニケーションを分析の対象としていたため、以下の [と](#) [と](#) が主の分析対象ではあるが、研究を進めていくうちに分析の枠組みが他の対象に援用可能であることから [と](#) [と](#) の分析も行った。

東京都議会やじ問題の分析

2014年に東京都議会本会議にて塩村文夏が妊娠・出産に関する質問を行っている最中に、複数の男性議員が「自分が早く結婚したらいいじゃないか」、「産めないのか」などとやじったことに端を発する「東京都議会やじ問題」の分析を対人関係的談話実践における利害・関心という観点から分析を行った。これについては、上述の Dániel Z. Kádár 教授、Yongping Ran 教授との共同研究プロジェクトの成果として、国際学会にて発表を行い(学会発表)、その内容を精査し、国内雑誌に投稿、掲載された(雑誌論文)。

国会討論の分析：やじとその応対に注目して

上述の国際共同研究プロジェクトが発展し、対人関係的談話実践を儀礼の観点から考察、分析し、国際雑誌の特別号へ寄稿することとなった。国会におけるやじとそれに対する応対のいくつかの例(2015年に国会にて安倍総理が辻本清美議員に「早くし質問しろよ」とやじった例を含む)を分析した。この成果は国際学会で発表するとともに(学会発表)、論文にまとめ、上述の国際雑誌の特別号の一部として寄稿した(現在査読中)。

ママ友間のコミュニケーションの分析

対人関係的談話実践における利害・関心についての理論的考察を進める中で、上述したモデルがいわゆる「ママ友」間のコミュニケーションの分析に援用できることから、大阪工業大学の犬塚生子講師と共同研究を行った。この研究は、国内学会(学会発表)と国際学会で発表し(学会発表)、前者についてはその内容を学会の大会論文発表集にまとめた(雑誌論文)。

ヘイトスピーチの分析

対人関係的談話実践における利害・関心が極端な形で表出した例としてヘイトスピーチを取り上げ、いくつかの談話を分析した。この成果については言語哲学者・社会学者と共同で開催した学際的な国内ワークショップ（学会発表）と国際公開討論（学会発表）において発表した。

<参考文献>

- Agha, Asif (1998) Stereotypes and Registers of Honorific Language. *Language in Society*, 27(2): 151-194.
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eelen, Gino (2001) *A Critique of Politeness Theories*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Fairclough, Norman (2003) *Analysing Discourse: Textual Analysis for Social Research*. London: Routledge.
- Halliday, Michael A. K. (1994) *Introduction to Functional Grammar*. (2nd edition) London: Edward Arnold. (山口登・箕壽雄訳 2001 『機能文法概説：ハリデー理論への誘い』くろしお出版)
- Goffman, Erving (1967) *Interaction Ritual -Essays on Face-to-Face Behavior*. New York: Pantheon Books. (浅野敏夫訳 2002 『儀礼としての相互行為-対面行動の社会学 新訳版』法政大学出版局)
- 井出祥子 (2006) わきまえの語用論』大修館書店
- Mills, Sara (2003) *Gender and Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press. (熊谷慈子訳 2006 『言語学とジェンダー論への問い』明石書店)
- Watts, Richard J. (2003) *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 柳田亮吾 (2015) 『ポライトネスの政治、政治のポライトネス：談話的アプローチからみた利害／関心の批判的分析』大阪大学大学院言語文化研究科博士論文

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- 大塚生子・柳田亮吾 (2018) 「ポライトネスと利害・関心：社会関係資本としてのママ友に注目して」、『日本語用論学会第20回大会発表論文集、第13号、25-32頁、査読なし
- 柳田亮吾 (2017) 「ポライトネスと利害・関心—東京都議会やじ問題をてがかりに」、『ことばと社会』19号、178-202頁、査読あり

〔学会発表〕(計10件)

- Yanagida, Ryogo and Otsuka, Seiko (2018) Hate speech and (im)politeness. Presented at Public workshop 'Hate speech: international perspectives in and for Asian region'.
- Otsuka, Seiko and Yanagida, Ryogo (2018) Fellow moms (mama-tomo) conflict "politely" with each other: How and why they conduct facework from the perspective of demeanor. Presented at 11th international conference on im/politeness.
- Yanagida, Ryogo and Otsuka, Seiko (2018) Heckling and counter-heckling in the Japanese parliamentary debates. Presented at 11th international conference on im/politeness.
- 大塚生子・柳田亮吾 (2018) 「イン／ポライトネスからみたヘイトスピーチ」大阪大学大学院文学研究科・文学部 若手研究者ワークショップ 社会における言語使用としてのヘイトスピーチ vol.1
- 大塚生子・柳田亮吾 (2017) 「ポライトネスと利害・関心：社会関係資本としてのママ友に注目して」日本語用論学会第20回大会
- Yanagida, Ryogo (2017) (Im)politeness and three forms of capital. Presentd at DiscourseNet Congress #2.
- Yanagida, Ryogo and Otsuka, Seiko (2017) "Why don't you marry first?": A classification struggle over heckling in and out of the Tokyo Metropolitan Assembly. Presented at 15th International Pragmatics Conference.
- Ryogo Yanagida (2017) (Im)politeness and interests: An interdisciplinary approach. Presented at 10th International Symposium on Politeness.
- 柳田亮吾 (2017) 「イン／ポライトネスと利害・関心」第71回多言語社会研究会
- 柳田亮吾 (2016) 「イン／ポライトネスとアイデンティティ—利害・関心に注目して—」第9回多言語社会研究会・研究大会

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。